

【聖書】

24「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。25そして、戻ってみると、家は掃除をして、整えられていた。26そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。」27 イエスがこれらのことを話しておられると、ある女が群衆の中から声高らかに言った。「なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は。」28 しかし、イエスは言われた。「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である。」

1 ほんとうの幸せ

私達は幸せになるために生まれてきました。幸せに生き、幸せに死ぬために、神様は命を与えてくださった。みんなそれは分かっている。だけど、何を幸せとするかは人によって異なります。何が私達にとって本当の幸せなのか。わかりきった事のようにですが、難しい事です。志望の大学に合格すること、仕事で成功すること、余裕をもって暮らせる位のお金を儲けること、子供を健康に育て上げ独り立ちさせること、人々から評価されること、日々平穩無事に過ごすこと…人それぞれにその願う事は違うでしょう。では、そんな私達それぞれが持っている願い事が叶うことが本当の幸せなのか。願い事が叶ったとしても、私達が傲慢になったり不健康になったりしたら、ほんとうの幸せとは言わないでしょうし、願い事が叶う為に、誰かを傷つけ貶めても、ほんとうの幸せとは言えないでしょう。案外に、ほんとうの幸せとは難しいもの。今日の聖書箇所では、イエスさまが「ほんとうの幸せ」について私達に簡潔に教えてくれています。28節です、「寧ろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である。」イエスさまの仰るほんとうの幸せについてご一緒にみていきたいと思えます。

2 本田司祭

この20節を次のような素晴らしい翻訳をした人がいます。「神を告げる出来事を聞いて、それを生きる人たちこそ、神からの力があるのだ。」本田哲郎というカトリックの司祭さまです。本田司祭は、大阪・西成の日雇い労働者の方々に寄り添い、奉仕しつつ、聖書のみことばをとき続けている方です。社会の底辺で呻く人々にイエス様を取り次いでいます。

20節は原語のギリシャ語に忠実なのは、新共同訳の方ですから、本田司祭は、ギリシャ語の原文から二つの言い換えをしている事になります。一つは、新共同訳では「幸いなのは」と翻訳されている言葉を、「父なる神からの力がある」と訳しています。二つ目の言い換えは、「神の言葉を聞いて守ること」との原文を「神の告げる出来事を聞いて、それを生きること」と翻訳している事です。この二つの言い換えには、本田司祭の聖書テキストの解釈が反映されています。その解釈はとても優れており、「本当の幸せ」の本質についていると思います。

3 神からの力がある

一つ目の本田司祭のおっしゃる「神からの力がある」とは、「神からの力の内に生きている」という事でしょう。そして「神からの力の内に生きる」というのは、「神の支配、神の国に生きる」という事になります。「力」とは私達を支配する力のことから。神の国について、今日の聖書箇所の前所で主イエスはこうおっしゃいました。「もし私が神の指で悪霊を追い出しているのなら、神の国はあなた達の所に来ているのだ」(11:20)。先週これを「神の国は、私達が手を延ばせば届く所にやってくる」と取り次ぎました。主イエスと共にやってくる神の国、私達が手を延ばせば届く所にやってくる神の力の内に生きることこそ、私達にとってもっとも幸せな事だと主イエスは語っておられる、本田司祭はそう読み取ってここに反映したのでしょう。

神の力の内に生きることこそ何よりの幸せ、それは真理だと思います。私達はその為に造られたものであるし、何より神は愛だからです。ヨハネの手紙 I にはこのような言葉があります。「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」(ヨハネ I 4:9~10)。自己中心的に生きて神に敵対するしかない私達の滅びを、深く強く憐れまれ苦しめられた父なる神。神は私達の滅びをご自身のもとする事を決意されるほどでした。その神の愛が私達の所に突入してきたのが、イエス・キリストの十字架と復活です。人間の愛、私達の愛は、自己満足的、自己中心的な愛となることが多いのですが、神の愛は違います。神の愛は義なる愛、完全に正しい愛です。このように話すと、「いや、親の子供に対する愛は、無償の愛と呼ばれているではないか！人間の愛だって正しい愛となる事があるではないか」と反論する人もいるやもしれません。確かに親の愛は素晴らしく、ありがたいものです。しかし、親といえども人間です。いつも正しい愛、無償の愛を注ぐことができるとは限りません。ど

こかに破れのある愛です。時には、子への愛が強すぎて、支配欲へと変わっていくことさえあります。

4 ある女の言葉

27節のある女性の言葉にも人間の愛の持つ危うさが伺えます。イエスさまが悪霊を追い出し、神の国が来ていることを語りかける力強い言葉に、人々は感動したのでしょうか。「イエスがこれらのことを話しておられると、ある女が群衆の中から声高らかに言った。『なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は。』」女の年頃は書かれていません。ひょっとしたら子供を生み育てたことがあるのかもしれませんが。そうだとすると、自分の子と、このイエスという方を比べて、主イエスの母マリアを羨んだ正直な言葉だったのかもしれませんが。あるいは、これから結婚する女の可能性もあるでしょう。自分にイエス様のような素晴らしい子供が与えられることを、夢見ながら叫んだのだとも想像できます。自分とは別の命を自分の胎内に宿し、生まれた子に乳房を吸わせる、そして自分を注いで育てた子供が、人々の役に立ち賞賛される立派な人となる、これこそ母の幸せ、女の幸せ、神からの祝福と考えたのでしょうか。

しかし、この女は、子供という自分以外の人間によって幸せになれる…と語っていることになります。果たしてそれが、「ほんものの幸せ」でしょうか。子供は親の所有物ではありません。それは聖書に次のような掟がある事からも明らかだと思います。「父は子のゆえに死に定められず、子は父のゆえに死に定められない。人は、それぞれ自分の罪のゆえに死に定められる。」(申命記 24:16)。人は誰も神の御前に一人で立つ者です。

また、自分の幸せを他の人間のあり方に委ねること、これほど不確かなことはありません。自分の幸せを他の人間のあり方に委ねる事により、その人のあり方まで自分が思うようにしようとするのは、正しい愛とは言えないし、神さまの力の内にいる幸せなあり方とも言えないでしょう。更に、親や肉親の愛というのは、「自分たちさえよければいい」という自己中心的な愛に繋がりがちです。愛によってさえ罪を犯す、それが私達人間の現実ではないでしょうか。

更には、この女の発言には、私達が他の人のあり方を誇りとし、幸せになろうとする傾向がある事を示しています。高名な人の関係者である事や有名な会社や組織の一員である事を誇る、自分の家柄を誇る、そして自分が他の人よりも上等な人間になった気持ちになる…私達が陥りがちな傾向です。しかし、それはほんものの幸せはない…とイエスさまは仰います。「人は兄弟をも救い得ない」。人の権威によりかかっても空しいだけです。

5 神の言葉を聴く

だからこそ、イエスさまはまず、「神の言葉を聞いて」とおっしゃいます。神の言葉を聴くとはどういうことなのでしょう。テサロニケの信徒への手紙一の中に、こういう言葉があります。「このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです。事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです。」(2:13)これは、パウロが、テサロニケという町で福音を語った時のことを回想して書いた文章です。パウロが語ったという意味で、明らかに「人の言葉」です。しかし、その「人の言葉」を通して、父なるみ神がイエス・キリストを通して地上にもたらしてくださった福音、良き知らせをお語りになった…と受けとめた人々がいました。この人々にとっては、パウロが語った「人の言葉」は、パウロを通して語られた「神の言葉」となったのです。毎週の礼拝説教も、ある人にとっては最初から最後まで「人の言葉」でしょうが、別の人々にとっては神の語りかけである「神の言葉」になります。聖書に記されている言葉も同様です。聖書の言葉は人が書いた言葉です。それが各国の言語に訳され、読まれます。その「人の言葉」が、ある人にとっては「神の言葉になる」ということが起こるのです。

「神の言葉になる」、「神の言葉になるという出来事」が起こるのです。誰にとっても、そしていつでも「神の言葉である」ものが存在するわけではないのです。「出来事」とは、新しく起こる私達には思いもかけないこと。だから、本田司祭の「神の言葉」を「神の告げる出来事」と解釈した事は本質をついた解釈と言えます。

6 聖霊

何故、「人の言葉が神の言葉となる」という出来事が起こるのでしょうか、それは「聖霊」が働いてくださるからです。説教者も、この「聖霊」が働いてくださられなければ、どんなに悪戦苦闘したところで、「人の言葉」から「神の言葉」を聴くことが出来ず、「神の言葉」を取り次ぐことは出来ません。そして説教を聴く会衆も、聖霊を受け働いて頂かなければ、「人の言葉」から「神の言葉」を聴くことは出来ません。それは、人間の理解力の問題ではなく、聖霊が働いてくださるか否かの問題です。「人間的努力が全くの無意味だと言う事はありませんが、決定的なことは神がなさること。」これは、ある牧師の言葉です。その通りだと思います。

パウロは聖霊についてこう言います。「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです」(ローマ8:15)。この聖霊は、私達を、天の神さまを「アッバ、父よ」と呼ぶ神の子変えて下さるお方です。神の力

をもって強く私達に働いてくださる霊なる神です。見えない神の御子、イエス・キリスト。そのお方が私達の内に住んで下さり神の御子の力を奮って、私達を神の言葉を聞くことができる者としてくださるのです。私達がなすべきことは、この聖霊が与えられることを祈り求めることです。主イエスは力強く約束してください。「まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」(11:13)

7 「なる」

先ほど、「神の言葉となる」と言いました。出来事だと言いました。それは、「ああ、神の言葉を通じて、神の力が今確かに私に働き、私を変えてくださっている」というのが分かるという事とも言えます。その時には分からなくても、必ず判る時が来るということ。だから、神の言葉は、その時その時に応じて非常に具体的な事柄として私達に示されます。

先々週の9/29(日)、S姉妹の偲ぶ会で、姉妹の愛唱聖句「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずですが。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」(コリント信徒への手紙 I 10:13)を紹介しました。S姉妹は長い信仰生活の中で試練にあわれた、非常に具体的なことで苦しみ悩み葛藤したのだと思います。その試練の最中にこの言葉と出会い、神の言葉として聞くことができ、その「神の言葉」がS姉妹に力強く働きかけたに違いありません。そして人間ではなく、真実な方ー父なる神への信頼に生きることはどういう事であるか、非常に具体的に何をすべきで、何をすべきでないかを示され、その神の言葉の示す所を守る事によって姉妹は造り変えられていったのだと思います。神の言葉がまさに新しい出来事となった、S姉妹を清め、助け、あたらしいS姉妹を造りだしてくださったのでしょ。S姉妹のように、この神の出来事の中に生き続ける事こそ、私達にとって最大の幸福であると主イエスはおっしゃいます。

8 私達自身を悪いものから守る

しかし「神の言葉を聞き、それを守る人こそ真に幸せな人」と語る時、「神の言葉を守らねばならない」と理解し、「自分の行為で自分を正しいものとする自己義認の道を開く」と非難する人たちがいます。実は神学生時代の自分にはそういう傾向がありました。今思えば恥ずかしい限りです。その頃の自分の心の内を思い返すと、主イエスの言葉を守れない自分、いえ、守りたくない自分がありました。そんな自分を正当化しようとする気持ちが潜んでいたのでしょうか。人の弱さであり愚かさです。

ですが、牧師になってそんな想いは打ち砕かれました。本田司祭の解釈でいえば、「神を告げる出来事を聞いて、それを生きる」ことを願わなければ、聖書のみ言葉を神の言葉として取り次ぐことはできない…とわかったからです。私的な事で恐縮ですけれども、私はイエス様と出会うまで四十年間、偽りに生きてきました。その時その時は一生懸命に生きているつもりでしたが、父なる神を知らず、どう生きてよいかもわからず、ただ自分の思い、人の思いだけで生きてきました。自己中心的な生き方であり、状況によって変わってしまう偽りに生きていました。四十歳で十字架のイエス・キリストを知り、神の義なる愛を知り、真理と出会った時、「ああ、これで移ろい易い自分に翻弄されずに済む」との安堵は忘れることができません。そして、私を愛しぬいてくださる主イエスだけは偽りにはしたくない…という思いが与えられました。しかし、「神の言葉を守れなくてもよい」と開き直すことは、私達の為に死んでくださった神の御子の愛を偽りとすることになるし、神の言葉を聞いて行おうとしないのなら、神の言葉を偽りとすることとなる、それでは聖書の言葉を神の言葉としては取り次げない…その事に牧師になってようやく気づかされました。

真実の言葉には、人を変える力を持ちます。神の言葉は人を変える、私達自身の行動をも変える確かな力を持ちます。そうでなければ、神の言葉ではありません。偽りの言葉です。私達の中で神の言葉が働けば、それが行いとして現れてくるのは必然なのです。必要な時を経て必ず行いとして現れてきます。

ですが、「神の言葉の働きを自分の働きだ」と傲慢に誇るのであれば、神の言葉を聞いたことにはなりません。神の言葉を聞くのも行わせるのも、私達の力ではなく、聖霊の力です。この事を弁え知ることは重要です。ここでも次のことは重要です。「人間的努力が全くの無意味だと言う事はありませんが、決定的なことは神がなさること―聖霊がなさること」。私達に出来る事は、自己吟味です。聖霊の力を自分の力として誇るのか、そうではなく聖霊の力を経験し、神を賛美し感謝し喜ぶのか―自分の状態をチェックし、自分は今、神の力の内にいるのか、いないのかという自己吟味になります。神の力のもとにいないのであれば、先ず、聖霊の導きを祈り求めるのです。そのようにして、「神の言葉を聞き守ること」が、私達を神様のもとへ留め、悪事に誘うもの、神から引き離す悪霊から私達自身を守ることになるのだと思います。

9 終わりより悪くなる

それを記しているのが、24節から26節の譬え話です。ここで、主イエスは、主によって罪の縄目から解き放たれ自由になったとしても、「神の言葉を聞き、守る」ことを願わないのであれば、聖霊を求めないのであれば、私達の状態がどうなるかという事を語っておられます。主イエスは、ここで「汚れた霊が七つ

の悪霊を連れて戻ってくる」とユーモラスに描いています。24節から26節です。汚れた霊が出て行った「砂漠」と訳されている所は、直訳すれば「水のない土地」「荒野」です。命を支えるものがない死の影が色濃く差す所、悪霊が大好きな場所、汚れた所と言われていました。悪霊も汚れた霊も同じものです。しかし、汚れた霊は、そんな見るからに自分達にふさわしそうな所よりも、私達人間を「我が家」と呼んでいます。汚れた霊に「我が家」と呼ばれたくはないものですが、私達が父なる神から離れがちであり、その心は死の力、滅びの力が強く支配しているかがよく分かります。しかし、そんな心も、一旦、父なる神を信じたことによって綺麗に整理されている、人間的な秩序に縛られる生き方から自由に解き放たれているのですから、始末が悪い。そこに、もともからいた汚れた霊が七つの他の霊を連れて入り込む。七つというのは完全数。完全なほどに汚れた霊が入り込む。何故汚れた霊達は入り込むことができたのか？「強い人」(11:21)が守ってくれていないからです。聖霊が守ってくれていない、人間の力で守ろうとしてもかありません。

しかし、この譬えは、自分を見ても、周りの人を見ても、「そういう事は確かにあるな」と思わせるものです。折角イエス・キリストを受け入れ心を解き放ってもらったのに、その後、自分で何とかできると思って聖霊に守っていただく事を拒否し、これを追い出そうとさえする人間、結局悪霊の住処としてしまう人間の姿を滑稽に描いています。

そして、いえ、だからこそ、そのようなことをしがちな私達だからこそ、「神の言葉を聞きそれを守る事によって、自身をかたく守りなさい。私が命を捨てて与えた自由を奪われてはならない」と私達を諭し、招いておられるのだと思います。聖霊を求め続けなさい、そして聖霊の力により、神の言葉を聴き続け、それを守り続け、神の力によって自身を守りなさい。そうすれば、あなたは神の愛の内に留まり続けることができる。あなたの心とからだを主イエスにあって守り抜く事ができる、キリストの自由に生きることができる、それこそが、ほんものの幸せ、真実に幸せな人だと主イエスは仰っています。

聖霊の力によって、神の言葉を聴いて、これを守ろうと願い、神の力の内に生き、主イエスの喜びに満ちた「まことに幸いなる者よ！」という祝福の言葉を聞きたい、そして横浜ナザレン教会の一員として、七日の旅路を歩んで行きたいと切に願います。